

## 【イアン・ポストリッジ インタビュー】ブリテンの音楽性と歌曲集《イリュミナシオン》の魅力

オペラ界屈指の知性派テノール、イアン・ポストリッジ。名門オックスフォードとケンブリッジで歴史学を専攻するも、美声を認められて声楽の道に進んだという異色のキャリアの持ち主です。今回は、英国の大作曲家ブリテンの音楽性と歌曲集《イリュミナシオン》の魅力を語っていただきました。

取材・文：岸 純信（オペラ研究家）、2016年1月都内にて



——貴方の素晴らしいキャリアの中で、ブリテンの作品と日本での演奏活動は、特別な位置を占めているようですね。

そうです。私がオペラの舞台を初めて踏んだのは1994年のこと、役柄はブリテンの《夏の夜の夢》のライサンダーでした。それ以来、ブリテンのオペラへの出演を重ねていまして、今年の秋もミラノ・スカラ座で《ねじの回転》に出る予定です。実は、22年前のデビューの頃は、学究生活と歌手の道のどちらを選ぶか、自分の中で決めかねている時期でした。でも、「プロの声楽家」になると決心した途端、遠く離れた日本からオペラへの出演依頼が届いたのです。それがオペラ歌手としての初契約になり、1995年の夏にサイトウ・キネン・フェスティバル松本の《放蕩者のなりゆき》（ストラヴィンスキー）でセレムを演じました。小さな役でしたが、現地に5週間滞在して取り組むうちに、日本の皆さんの勤勉さや演奏を聴く際の集中力にそれは感銘を受けました。以来、シューベルトの歌曲リサイタルを開いたり、来日オーケストラの演奏旅行にソリストとして加わったりと、この国をたびたび訪れるようになっています。今回は、日本が誇るマエストロ大野和士さんの棒で、東京都交響楽団の皆さんと初共演できることを、私自身も本当に楽しみにしています。

——今回はブリテンの歌曲集《イリュミナシオン》（1939）を歌われます。この曲を選ばれた理由について教えてください。

はい。2014年の春にリヨンで大野さんと初めてご一緒し、ブリテンの《セレナード》を歌ってマエストロの音楽性に深く共感したのがきっかけなんです。オーケストラからそれは幻想的な音色を引き出され、声を凌駕することなく、歌を支える立場に専念して下さいました。そこで、

日本で共演させて頂けたならと私からも希望し、やはりブリテンが良いですねと話合った結果、初期の代表作の歌曲集《イリュミナシオン》を選びました。

——《イリュミナシオン》の演奏に関しては、いろいろな体験があるそうですね。

そうです。まず、ブリテンと言えば近代イギリスの大作曲家ですが、オペラに名作が多いものの交響曲は書かなかったので、管弦楽の愛好者層には馴染みが薄い向きも居られるかもしれませんが。でも、彼を『インディーズ映画の名監督のような作曲家』と評する人も多いのです。ハリウッド映画のような大衆性の持ち主ではないですが、世界中に熱烈なファンが居ますし、ブリテンに初めて触れた人が、やがて熱心な聴き手と化すケースも少なくないですよ。以前、ザルツブルグ・イースターで《イリュミナシオン》を歌った時、客席には『ブリテンって小難しい?』という空気がありありと漂っていました(笑)。でも、終演後には、皆さん眼の色を変えて熱狂されたのです。音楽の力が無理なくストレートに伝わったのでしょう。《イリュミナシオン》については同種の経験が本当に多いです。

——《イリュミナシオン》という題名が示す通り、この歌曲集は天才ランボアの詩に拠るものです。全9曲(第3曲は2部構成)ですが、世界観がそれは多様多彩で面白いですね。ブリテンはなぜこの詩作に曲をつけたのでしょうか?

ブリテンは少年期からフランス語に曲をつけていましたが、《イリュミナシオン》は彼が渡米しニューヨーク郊外で暮らした時期の作です。ランボアが『イリュミナシオン』の原稿を纏めたのもドイツ滞在中ですね。だから、二人の間には、異境の地で作品を書いたという共通項が存在しますし、ブリテンも異国の大都市に住む歓びと恐怖がないまぜになる中で、ランボアの詩と自分の心を共振させたのかもしれません。それに、二人には同性愛者という共通点もあり、その性的衝動を描く一曲(〈美しい存在〉)も入っています……。そういえば、ランボアの詩に曲をつけたのはブリテンぐらいかな? フランス人にも居ないと思いますが、彼の詩は音声自体が音楽的です。言葉だけで音楽のような響きが生まれるのです。内容は確かに謎めいていますが、詩人のイメージの塊には意味が明確でない場合も多く、そういった曖昧さも、この詩が音楽と合わさっても成り立つ理由の一つでしょう。



——確かに、《イリュミナシオン》では、曲ごとに内容がばらばらで抽象的です。でも全体的な統一感は強く、聴けば聴くほどブリテンの音の宇宙に魅了されます。聴きどころをいくつか教えて下さいますか?

はい。冒頭の〈ファンファーレ〉には調性が二つあります。弦がトレモロなのでどちらの音に転がっているか分からないですよ（笑）。次の〈都市〉ではいきなり『大都市のカオス』に放り込まれ、〈王位〉はお伽噺の語りを思わせるもの。こうした『ほっとするページ』を巧く挟み込むのもブリテンの腕の冴えでしょう。〈海の絵〉はコロラトゥーラの勢いが光の渦のよう。短い曲ですが、歌手は力の配分に要注意です。

一方、先述の〈美しい存在〉はやはりホモエロティックで曲調も耽美的。でも、次の〈パレード（客寄せ道化）〉は対照的に、いきなり低いト音から歌い始めて、様々な名前をからかうように並べるなど、騒がしくも活気に満ちた世界です……。終曲の〈出発〉ですが、題名とは裏腹に、最後の和音は重くて暗いです。以前、ワルシャワで歌った際に楽譜を読み返して気付きましたが、曲が完成した日付は、ドイツのポーランド侵攻の直後でした。時代が作品に及ぼした影響の一例でしょうか……。

《イリュミナシオン》はもともとソプラノの為に書かれた曲ですが、男声の方が力強い表現が出来るので今はテノールが歌います。ブリテンのオーケストレーションはマーラーの系譜に連なるもの。この曲でも弦しか使っていないのに、音色がそれはカラフルで目も眩むかのようです。ハーモニクス（倍音）もバイトーナリティ（複調）も使い、時には尖った響きも出てきたり。まさに、音色の宇宙として楽しんで頂ければと思います。

**6月8日（水）19:00 開演 東京文化会館**

第809回 定期演奏会 A シリーズ

**6月9日（木）19:00 開演 サントリーホール**

第810回 定期演奏会 B シリーズ

指揮／大野和士

テノール／イアン・ボストリッジ \*

ブリテン：歌劇『ピーター・グライムズ』より「4つの海の間奏曲」 op.33a

ブリテン：イリュミナシオン op.18 \*

ドビュッシー：《夜想曲》より「雲」「祭」

スクリャービン：法悦の詩 op.54（交響曲第4番）